学びのひろば旭 vol.135

旭市教育委員会
教育総務課（☎85-8617）
生涯学習課（☎85-8627）
スポーツ振興課（☎64-1132）

大原幽学記念館企画展
幽学と子育て―その生長したること、松がごとく―

幕末の農村指導者として知られる大原幽学は、次世代を育成することの大切さを説き、画期的な教育指導を行いました。記念館では、幽学が熱意を持って取り組んだ「子育て」をテーマに、令和７年２月16日（日）まで企画展を開催しています。

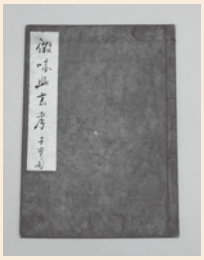
幽学の子育てに対する思い

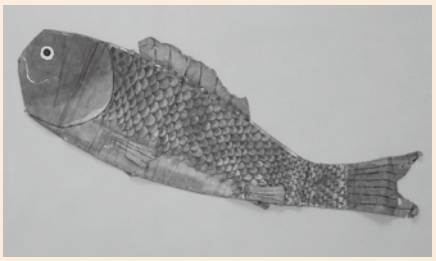
荒廃した農村の復興と存続は、幽学の教えを受ける名主と農民たちの切なる願いであり、その実現には、次世代を担う子どもたちの養育は欠かせないものでした。幽学が子育てに強い関心を持っていたことは、自身の著作「微味幽玄考」全５巻のうちの１巻が「子育之部」とされていることからも見て取れます。

子どもが一人前になるために

当時、女子は13歳、男子は15歳が成人年齢とされていました。それまでに一人前となることを目指し、誕生から元服までの通過儀礼を教育の場として重視しました。

門人に子どもが誕生すると、幽学がその子の名付け親となり、６歳の紐解祝いを迎えると「紐解心得」が渡されました。また、幽学の教育指導で最もよく知られているのが「換子教育」です。これは成人を迎えるまでに、門人同士で子どもを


微味幽玄考


幽学が作ったと伝わる和紙のこいのぼり

１～２年間預け合って養育するというものです。子どもを預ける側も預かる側も責任を持って教育できるように、幽学は心得を示しました。

ただ情の深いことが極上である

「子育之部」では、良いことも悪いことも言葉ではなく行動や態度で示すことや、子どもを注意深く観察し、その子のタイミングに合わせて手助けや教えを行うことなど、大人の子どもたちへ向き合う姿勢について説いています。

巻末で「ただ情の深いことが極上である」と締めているように、幽学は子どもに対して分け隔てなく愛情を注ぐことを大切にしました。幽学自身には子どもがいませんでしたが、残された多くの資料から、子どもたちへの深い愛情と将来への願いが強く感じられます。

企画展のくわしい内容は、大原幽学記念館（☎68-4933）に問い合わせてください。

広報で振り返る
あの日あのときのあさひ 第27回

1988年（昭和63年）12月号

このコーナーでは過去の広報を紹介し、その時代を振り返ります。

今回は広報ひかた昭和63年12月号を紹介します。

この号では、大原幽学先生130年祭・旧林家住宅復元竣工式典の様子を報じています。旧林家住宅は、幽学の高弟であった林伊兵衛の住居で、幽学の設計・指導により建設されたと伝えられています。昭和63年に大原幽学遺跡史跡公園内に復元され、同年11月に記念式典が行われました。昔の農家の生活を知る貴重な文化遺産となっているほか、現在も「幽学の里で米作り交流事業」などで活用されています。

復元された旧林家住宅

表紙